

農村における生活環境と景観

— 緑豊かな田園景観と生活環境について考える —

高度成長時代を経て、生産性のみを追求すればよいという時代は終わった。工業製品の生産はもとより、自然を相手に食糧生産を行う農業においてさえ自然環境の保全を真剣に考えなければならぬ時代がきた。一方、農村を食糧生産の場とだけ捉えるのではなく、都市生活者にとってもかけがえのない自然環

境の一部であり農業の多面的な機能を見直そうとする動きが見られるようになってきた。

この特集では、農業と自然環境の係わりのなかで、特に田園景観とそこに住む農村生活者と生活環境について焦点をあてた。
(編集部)

農村整備の新しい流れ

農村は長らくの間、都市に対する労働力と土地の供給源であった。ところが、近年になって、所得の全般的な向上と余暇の増大を背景として、農村が持つ自然環境や景観、あるいは農耕に根ざす文化までもが見直され、農村が逆に都市

から人を呼び込むような流れが生じ始めている。このよき傾向は、依然として都市への人口流出に悩む農村に、従来の農業振興や工業誘致、あるいはリゾート開発に代わる「ムラおこし」の手段として、期待を抱かせてもいる。

土地改良事業の「正式」名称が「農業基盤整備事業」から「農業農村整備事業」へと変更されたことも、こうした流れと無関係ではない。今回の名称変更は、たんに農業の生産基盤整備から農村の生活環境整備へのシフトを象徴するだけでなく、農村の生活環境整備の目的そのものが、「都市との格差是正」から、都市にはない「農

新しい村づくり

岩手大学農学部助教授

広田 純一

村らしい農村づくり「へ」と脱皮を図る契機となるものだからである。別な言葉でいえば、農村居住者のための「内向き」の農村整備から、

農村の性格を規定するもの

―都市への時間距離

現代の農村が抱える課題の多くは、都市との位置関係でその大枠が決まるといってよいから、農村を都市への時間距離によって分類しておくことが役に立つ。

まず、都市に一番近いところには、都市への通勤のための住宅地を求めて、農村外から新住民が転入してくる「通勤住宅圏」がある。住宅開発が進むこの地域では、いわゆる農村地域の「活性化」は問題にならない。後述する農村型レクリエーションの場としては、都市から近いという利点がある反面、農村らしい景観や自然環境の保全・形成には困難が多い。

つきに、「通勤住宅圏」の外側には、農村に住みながら都市への通勤が可能な「在村通勤圏」が広が

都市居住者をも視野に入れた「外向き」の農村整備への衣替えといえよう。

この地域では、「通勤住宅圏」のように、外からの転入はなく、いわゆる郊外型住宅開発は見られない。しかし、地元の家の子弟は、経済的に無理をしまで「通勤住宅圏」内に家を求めなくても、親元から通勤できるので、農業は継がないまでも、地元に残る可能性が高い。都市化の直接的な影響が小さく、かつ集落が安定的に維持されるであろう「在村通勤圏」の農村こそが、「農村らしい農村」を目指す今後の農村整備の主たる対象である。

「在村通勤圏」のさらに外側には、都市への通勤が困難な「通勤不能圏」がある。むしろどのような辺りな地域でも農業以外の就業の場はあるが、将来にわたって安定的な

就業機会を提供できるほどの都市が通勤可能範囲にあるかどうかの問題である。「通勤不能圏」では、都市に頼らずに所得を得る方法を考えなければならぬが、だからといって、ここで述べるような農村整備を通じて、従来の農業振興や工業誘致、あるいはリゾート・観光開発によって達成できなかった「ムラおこし」が可能となると考えるのは、やや楽観的に過ぎよう。

さて、農村整備の先進地としてよく引き合いに出される（旧西）ドイツでは、都市や産業についての分散政策が有効に進められてきたこともあって、農村の大部分は「通勤住宅圏」もしくは「在村通勤圏」に収まってしまふ。しかも、農業的土地利用と都市的土地利用の混在が日本のようにひどい状態にないので、「通勤住宅圏」内であっても、農村的景観や自然環境が良好に保たれている。

つまり、ドイツでは都市への通勤によって農村が存続できるといふ基盤があり、その上での農村整備なのである。日本でドイツ流の

農村整備を考える場合、このような農村の立地条件の違いをよく踏

今後の農村整備のアイテム

今後に期待されている農村整備の具体的なアイテムは、農村型レクリエーション、景観、自然環境、そして歴史的環境である。

農村型レクリエーション

恵まれた環境の中で、散歩、ジョギング、サイクリング、日光浴、読書、昼寝、おしゃべり、食事、自然観察、ボードウォッチング、



写真1 サイクリング道
(ドイツバイエルン州オーディング地区)

まえておく必要がある。

天体観測、水遊び、土いじりなどを楽しむ場として、いま農村が注目されている。そのためには、専用の施設や用地、つまり、歩道やサイクリング道(写真1)、公園、広場、休憩所や宿泊所、水辺(写真2・3・4)、市民農園などを整備する必要はもちろんだが、その前提として、農村全体にわたる景観(写真5)や自然・歴史的環境の保全・形成が必要となる。

こうした方向での農村整備を、地元の側では「ムラおこし」の手段として期待するわけだが、このような楽しみ方、余暇の過ごし方自体が日本ではまた発展途上にあることも考えておかねばならない。また、農村型レクリエーションは、集落や耕地を含めた農村全体の環境を利用するのであるから、維持管理の対象が広く、そのための手間や費用も馬鹿にならないだろう。ドイツなどに比べて温暖多雨の日

本では、雑草の管理だけでも大変である。しかも、安上がりな楽しみめることが「売り物」なのだから、来訪者から高い料金をとるわけにはいかない。当り前のことではあるが、農村に農家が住み、きちんと農業を営んでいることが、この種の農村整備の前提とならなければならぬのである。その意味で、農業振興は依然として重要である。極論すれば、農村景観の維持のために、(補助金をつぎ込んで)農業を続けてもらうという視点が必要ならば、こうした農村整備も立ち行かないということである。

景観

「農村を美しく」という場合、そこには二つの動機が含まれているように思う。一つは、農村に都市的・近代的な要素が大量にかつ急速に入り込んだ結果、農村景観が非常に乱雑なものになったことへの反発、もう一つは、そうした都市化・近代化以前の伝統的農村景観への愛着である。このうち、失われた過去の景観を復元し維持す

ることは、観光目的の特殊な地域を別にすれば、きわめて実現性が乏しい。せいぜい伝統的景観を部分的に模倣して現在の景観に生かすくらいだろう。しかし、伝統的景観に戻らないとして、では新しい農村景観がどういうものであるかについては、今のところ適当なモデルがあるわけではない。できるだけ自然になじむ景観が求められているといった程度である。むしろ欧米の農村景観を直輸入する訳にも行かない。景観の創造は文化の創造であって、長い年月をかけた大事業という認識がとりあえずは必要ではあるまいか。

自然環境

農村整備に関連して自然環境が語られる場合、どちらかという人間にとって「親しい」自然、あるいは「懐かしい」自然に重点があって、生態的な意味での自然という視点がやや乏しいように思われる。この点、ドイツでは、動植物や鳥、昆虫などの生息場所としての生態的な自然そのものを保護し、復元していく姿勢が明瞭に存

写真3 写真2の湖畔に設けられたレストラン



写真2 農地整備事業で新設された池の湖畔で日光浴を楽しむ人々（ドイツ・バイエルン州ウンターシュライスハイム地区）

写真4 写真2の事業地区の全景（手前が新設された池。奥に見える市街地はミュンヘン市。本地区は人口126万人（1986）のミュンヘン市の中心から約16kmの位置にあり、完全な「通勤住宅圏」である。）





写真5 上・下 整備前後の集落内部の景観
(ドイツ・バイエルン州)

在する。それどころか、農産物の供給過剰問題を抱え、国民の自然保護への関心が極めて高いドイツでは、農業の生産性を抑えても自然保護を優先するという段階にまで来ている。最近の日本でも自然保護に対する関心が高まってはいるが、このレベルに至るにはまだ先が遠いという感じである。

ところで、ドイツに比べてすい

ぶん「遅しく」みえる日本の自然の場合、かりに水辺や敷を、人工的に「美しく」作ったと

しても(写真6)、翌年には草ぼうぼうとなって、ドイツのように、いつまでも当初の「美しい」自然の状態のままではいてくれないような気もする。ここら辺りにも、ドイツ流をそのまま真似ることができない問題がありそうである。

歴史的環境

集落や耕地の現在の景観はそれ

農村居住

自体が歴史的環境である。歴史的環境の保全の上で考えておかねば

美しく自然豊かな農村を作ることに農村の「活性化」につながるもう一つの側面は、都市から農村への移住である。これには、「本宅」を農村に移し定住してもらう場合と、「本宅」は都市に置いたまま「別宅」を農村に設けてもらう場合(いわゆるマルチ・ハビテイション)とが考えられる。

前者のように「本宅」を移すケ

ならないのは、いわゆる文化財保護のような、現状を一切変更させない硬直的やり方では、農村居住者の理解も得にくく、実効性が乏しいということである。伝統的な民家が外部の人からみてどんなに美しく、また価値のあるものでも、そこに住む人にとってはただの古ぼけて生活しづらい一個の家に過ぎない。完全な「凍結保存」を目指すより、その時代の生活や生産様式に見合った「動態保存」を選ぶ方が、かえって歴史的環境を有効に残すことになりはしないだろうか。

ースとしては、①勤め先と居住地の両方を農村部に移す、②勤め(通勤)先は以前と同じまま居住地だけを農村に移す、③仕事を引退した人が居住地を農村に移す、という三つのパターンが考えられる。このうち①は、農村部での就業の場が非常に限られるので、今後ともそれほど一般的にはならないだろう。これに比べると②の方が可

能性が高いように思われるが、通勤圏が片道二時間を越えている東京圏などでは現実的でなく、地方都市圏などに限られよう。③は就業の場や通勤時間の制約はなくなるが、医療や買物など日常生活の便が余り悪いところでは、かつての都市生活経験者が暮らせるとは思えない。

他方、後者のように「別宅」の場合には、都市への時間距離は余り問題にならないように見える。しかし、これも専門家によれば、「別宅」は片道三時間程度までの距離にないと頻繁な利用は望みにくいという。しかも、この手の需要は圧倒的に大都市圏居住者のものであり、範囲を広げても札幌、仙台、広島、福岡のような地方中枢都市の住民までだろう。つまり、「別宅」需要がある程度見込めるのは、三大都市や地方中枢都市に比較的に近い地域だけということである。

以上、やや悲観的なことばかりを強調したきらいもあるが、要は、都市から農村に人を呼び込もうとするなら、慎重にその需要を見極める必要があるということである。

る。農村整備に金がかかる以上、根拠のない楽観論は禁物である。

本稿では、近年の農村整備の一般的な背景や内容を主眼としたため、北海道の特殊事情には特に触れていない。北海道では、都市の配置や農業のあり方、景観や自然環境など、本州以南とは条件が異なる点が多く、ドイツ流の農村整備がやりやすい面もあれば、逆に難しい面もあることをお含みおき願いたい。

なお、本稿の内容は、同じ大学の研究室の岡本雅美教授との日々の討論で得られたものであり、岡本教授の見解が随所に含まれていることをお断りしておく。

また、ドイツの農村整備事情については、農村開発企画委員会の石光研二氏からご示唆を頂いた。付記して謝意を表する次第である。



写真6 疑似自然水路（水路中の草も人工的に植えられたもの）
（ドイツ・バイエルン州ミッテナウ地区）

これからの農村

農業・農村の多面的機能に着目した
北海道農村の振興方策

(社)地域社会計画センター

主任研究員 樋浦道夫

はじめに

私ども(社)地域社会計画センターでは、これまで都市住民の農業・農村への係わりに関する意識調査を数回実施してきた。

これらの調査を通して東京大都市圏都市住民の農業・農村への関心を探ると、北海道(農業・農村)への憧れ、ロマンが一定割合で存在していることが窺える。また、北海道の有力対抗馬は、信州・長野県(農業・農村)である。

しかし、この両道県とも高度経済成長期の大量生産・大量流通に根ざした大衆社会状況のままであり、今や時代は分衆社会状況、個性化の時代に変転しているのに、それに対応することができず、大衆社会状況で形成された「よきイメージ」を顧客化するに至っていない。

編集者から与えられた課題は、北海道農村を農業生産の場であると同時に、大地の広がり・水や緑・美しい景観を生かして、都市住民に教育・保養の場として提供するための方策への提言である。

民活型のリゾート地形成は、バブル経済の終焉とともににはじめてしまったが、与えられた課題は、多面的機能を生かした農村型リゾート地形成であるとして、この小論では、分衆時代の顧客化を狙いとした私の農村型リゾ

ート形成の一般論を展開した後、北海道での農村型リゾート地の形成についての方策を論じてみたい。

私の農村型リゾート論

農村型リゾートとは

何か？

農村型リゾートとは、民間企業型リゾートに對置した理念である。

民間企業型リゾート地は、農村に落下傘的に形成され、周辺の農山村・農民とは無関係に孤立国となる場合が多い。

農村型リゾートは、リゾート地の形成によって周辺の農山村が活性化し、農山村に住む人々の「暮らし」と「こころ」も豊かになるものでなければならぬ。

リゾートは、「しばしば」「外に出て行く」という意味であるから農村型リゾートは、都市の住民と農村の住民の「しばしば」の交流でなければならぬ。互いに「こころ」の通い合うものでなければならぬ。

互いに、都市住民にとっては農村は保養・休養の場となり、農村住民にとって都市は活力を得るアーバンリゾート地とならなければならぬ。

この二つの理念から分るように農村型リゾートは、これまでの観光農業やレジャー農業とは全く異なる原理で形成されなければならない。

農村型リゾート地の

形成原理

農村型リゾート地形成原理の第一は、特定地域の特定期客との交流を中核としなければならない。観光地やレジャー基地の形成の場合、不特定多数の客をどれだけ多く、どれだけ効率的に呼び込むかが基本戦略となる。農村型リゾート地の形成の場合は、都市の特

定地域の特定顧客とのこころの触れ合う交流が基本戦略となる。

農村型リゾート地形成原理の第二は、交流相手の特定顧客のニーズに対応してリゾート地形成を図ることである。

最近、よく「地域資源を活用してムラの活性化を図る」とか「地域資源を生かしたリゾート開発」とか言われている。しかし、これは不特定多数を相手とする観光振

体験農園での馬鈴しょ収穫
子供達の農業体験学習



興原理である。全国どのムラも地域資源を活用すれば、全国漬物だらけ、山菜瓶詰だらけになる。地域資源活用主義は、一見、個性主義に見えるが、実は高度経済成長期の大量生産・大量消費の原理と同根なのである。

農村型リゾート地の 発展段階

私は、農村型リゾート地は次のような段階を経て形成されて行くものと考えている。

①体験農園段階

都市の特定地域と農村の特定地域とが交流する契機は、多くの場合、都会の子供達の農業体験学習から始まっている。特に小学五年生の体験学習からの場合が多い。

田舎のお母さんは「あったかかった」という子供達の感想文に見られるように心の触れ合いが始まる。

この「あったかかった」こそ、私の農村型リゾート論の原点となる。

子供の体験学習による交流からお母さん達の交流、家族連れの農

園体験へと展開する。

②ふるさと産品定期購入 段階

子供達だけの農村体験、家族連れの農園体験を経て、その体験地で採れた「ふるさと産品」の定期購入、会員制加入へと進む。

都会で、その地の産品を定期購入するのは、その産品を買っているのではない。「あったかい」という付加価値を買っているのである。

各地で会員制ふるさと産品の産直販売が展開されているが、一時的ブームはあっても、その後はほとんど停滞してしまう。この本質「あったかい」心の交流がベースとなっていない場合が多い。

③オーナー農園段階

体験農園・ふるさと産品購入を通じて、繰り返しその地を訪ねているうちに、自分達家族の果樹や作物で完熟の味を試したくなる。田舎のお爺ちゃんやお婆ちゃんに教わりながら、自分達で育ててみ



ホクレン大収穫祭
北海道各地の産品が豊富にならび
札幌市民にも人気が高い。

たくなる。

これが農村型リゾート形成でのオーナー農園段階である。お爺ちゃんやお婆ちゃんに教わりながらがみそである。

④宿泊施設・貸農園段階

年間四〜五回の「あったかい」ムラ訪問では飽き足らない、長期休暇や週末ごとに、緑と豊かさのなかで過ごしたい。

ムラの休養宿泊施設が自らのセカンドハウスを持ち、健康野菜などを栽培するようになると、農村型リゾートの第四段階である。健康野菜の「健康」とは身も心も健康になるという二重の意味においてである。

⑤農村移住段階

第四段階がさらに深まると、子供の「健康」のため家族の一部が住み着くマルチハビテーションや

働く場を田舎に求めた移住段階へと展開する。働く場は、アトリエであったり、ペンションであったりすることもある。

農村型リゾートの最終段階は、定年退職期を迎えた人達の農村移住である。逆に、都会の人達が定年退職後、そのムラに移住したくなるような交流関係を結ぶことが、農村型リゾート地形成の最終目標であるということもできる。

農村型リゾート地 形成と北海道農村

ふるさと産業

消費者意識調査から

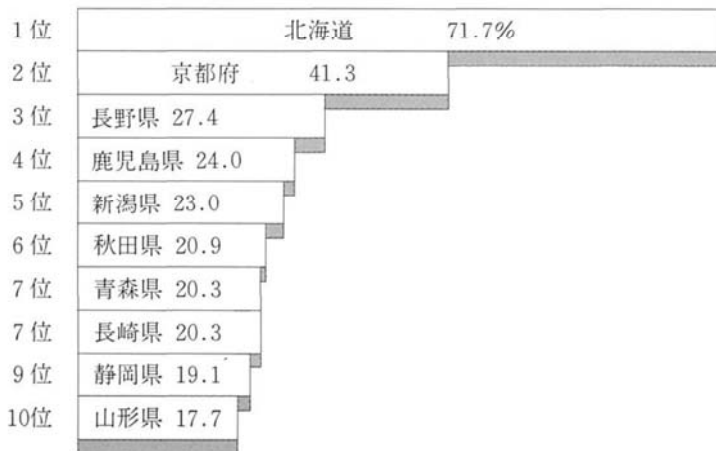
私も(社)地域社会計画センターが、平成二年一月に大都市地域の二十歳以上の女性、二、〇〇〇人を対象に実施した「ふるさと産業に関する消費者意識調査」によって、北海道ふるさと特産品の優位性を確認しておくことにする。

まず、「ふるさと物産展」などでふるさと特産品を購入した経験の

ある者は、全体の八五・四%で、その購入経験者に「購入したのはどの県の特産品であるか」と尋ねたところ、図1に見られるように、北海道の特産品購入者の割合が七一・七%と群を抜いて高くなっている。

つぎに、通信販売や宅配便で、ふるさと特産品を購入した経験のある者は、全体の三九・八%で、その購入経験者に「購入したのはどの県の特産品であるか」と尋ね

図1 「ふるさと物産展」におけるふるさと物産品
購入者の特産品生産地ベスト10



注：数字％は購入率

資料：(社)地域社会計画センター「ふるさと産業調査報告書」

表1
宅配便などによる特産品購入者
の特産品生産地ベスト10

順位	都道府県	購入率
1位	北海道	50.2%
2位	長野県	23.1
3位	青森県	20.5
4位	東京都	15.7
5位	新潟県	14.0
6位	和歌山県	13.1
7位	山形県	11.8
8位	静岡県	11.4
9位	愛知県	9.6
10位	長崎県	7.9
10位	千葉県	7.9

資料：(社)地域社会計画センター「ふるさと産業調査報告書」

表2
ふるさと体験経験者の
体験先ベスト10

順位	都道府県	訪問率
1位	長野県	25.7%
2位	静岡県	21.8
3位	埼玉県	17.8
3位	山梨県	17.8
5位	北海道	14.9
6位	愛知県	13.9
7位	福岡県	11.9
8位	福島県	10.9
9位	東京都	9.9
10位	栃木県	8.9
10位	群馬県	8.9
10位	千葉県	8.9
10位	奈良県	8.9

資料：(社)地域社会計画センター「ふるさと産業調査報告書」

たところ、表1に見られるように、北海道の特産品購入者の割合が五〇・二%と高くなっている。

この結果からも分るように、大都市住民の北海道との係わりは、誰でも参加し得る「デパートやイベント会場では、著しく評価が高いが、特定顧客度が高まるにつれてその位置づけが低下する傾向にある。

さらに、「ふるさと体験」(農産物収穫や果樹等のオーナーなど)への参加経験者の割合は、一七・五%と特産品購入に比べ低下し、「その体験先はこの県ですか」と尋

ねたところ、表2に見られるように、長野県が第二位で、北海道は五位にランクされている。

といっても、「ふるさと体験」で栃木・群馬・千葉等の首都圏近郊を上回っている点は注目しておく必要がある。

私の体験から

私も商売柄、デパートの物産展や各種のふるさとフェアにはできる限り顔を出すことにしている。今年も「91北海道フェアin代々木」が九月二十二日・二十三日に実施された。私の休日の散歩コー

は、表参道一丁目代々木公園一公園通りスベイン坂一渋谷センター街一宮益坂一子供の城であるので、今年も散歩がてらに二日間とも立ち寄った。例年のように「雪の原っぱ」「サホーク丸焼き」「どうもろこし」に人気が集まっていたが、私は専ら水産物を買って込んだ。

今年、注目されたのは、住宅供給公社と「グリーンバンク」の両コーナーを比較して、「グリーンバンク」のコーナーに相談に立ち寄る人が意外と多かった点である。昨年までは、パブルのせいかな住宅供給公社のパンフに人気があった

のに……。」「新規就農・体験学習ハントブック」を手にした若い奥様たちの会話を追いかけると、「どここの〇〇ちゃん、北海道の農業体験に参加すれば、立ち直れるかも」と真剣に話していた。

確か三年前の九月三十日、十月一日に「大分・北海道一村一品激突大会」がこの「フェア」の前身であるように記憶している。そのオープニングで、平松知事の激突宣言のあと、北海道の副知事は大分を先輩と持ち上げた。しかし、東京の奥様たちの人気は、食で依然としてシイタケとカボスだけの

大分では、北海道の水産物にかなわなかった。ケガニがカボスを飲

み込んで北海道の勝ちであった。

北海道における農村型

リゾート地形成の方策

このように農業・農村の多面的機能を生かした農村型リゾート地の形成といっても、北海道の場合、大都市住民に圧倒的な人気を博しているのは、農水産物の「味」である。

私の農村型リゾート地の形成段階論に照らしてみても、①体験農園段階から、②ふるさと産品定期購入段階が、当面の目標となる。しかし、③オーナー農園段階や、④宿泊施設・貸農園段階、に達するには距離のハンディを克服することが必要となる。

従って、時代が大眾社会状況から分衆社会状況へと転換しているとの認識の下で、②ふるさと産品定期購入段階、を深めることが、北海道での農村型リゾート地形成の基本方策となる。

事実、私の体験からしても、私

は、北海道のカニやスジコの大ファンであり、デパートの地下食品売り場や宅配便でしばしば購入する。しかし、デパートや宅配便では北海道への帰属意識が生まれにくい。大眾の一人として、ただ北海道の産品を購入しているだけだ。

もし、近くに、北海道産品のアンテナショップがあり、そこで常時、新鮮な北海道産品が買えるとしたら、そこへ出かけて行くであろう。旬を求めてその現場まで出かけて行くかもしれない。そこまで行けば、北海道に組織された生活者となる。

大都市住民を分断・組織化してゆくことこそが、分衆時代の販売戦略である。

そして、分断・組織化された大都市住民の一部は、北海道の農村を訪ね、その多面的機能に浸るこ

とになるかもしれない。

いずれにしても、北海道での農村型リゾート地形成は、北海道産

品購入者の特定顧客化が第一であり、特定顧客の一部が北海道を訪ねることとなる。

むすび

これからの農村は、農業生産の場であり、そこに住む人達に快適な生活が保証されることと併せ、都会の住民に対し、教育や保養の場を提供するなど多面的な機能の発揮が必要となってきたと「霞が関」でいわれている。

このような考え方に沿って、東京から二時間圏の各地の農村で、農村型リゾート地の形成が試みられている。しかし、北海道の農村振興にあたって、東京から二時間圏と同じ考え方で進めてよいのであろうか。

北海道は北海道独自の考え方で、九州は九州独自の考え方で、農村型リゾート地の形成を図る時代ではなからうか。

その北海道の独自性とは、東京大都市住民に圧倒的支持を受けている北海道の「味」を中核に、その特定顧客化を図り、分断・組織化することである。

これからの農村生活環境

—水から生活環境を考える—

札幌学院大学

教授 鮫島 和子

農業地域と 水洗トイレ

近年、日常生活での都市生活と農村生活の格差は少なくなっている。電力の供給されない地域はないから、電化製品なども都市生活とほとんど変わりなく普及している。ただ一つ、目に見えて違

うのは下水道の普及率ではないかと思う。これは農漁村として独立している地域だけではなく、都市部と農業地域が共存している市町村すべてにいえることである。

札幌市周辺で、比較的下水道普及率の高い都市でも、農業地域の下水をどのような形で処理しようか検討中のところが多く、農業地域の下水道計画が実現するまでには、かなり年月がかかると聞いて

いる。

「流域下水道」はもち論のこと「公共下水道」にしても、下水処理場の建設そのものより下水管渠建設のほうが大変なのであり、面積の割りに人口の少ない農業地域の下水道普及が遅れることになつてしまふ。

残された自然を求め、食生活の安全性を求めて、都市生活者は農村生活者との交流を望みはじめて

いる。各地域でのイベントに参加する都市生活者の数は多いし、もっと積極的に、生産者と消費者という立場で産地直送のシステムをつくり、時には農作業の体験もさせていたがながら、顔の見える心の通った生き方をはじめている都市生活者のグループも増えてきている。

観光目的の人たちをも含めて、今後ますます都市生活者と農業地域生活者との交流は盛んになることと思われる。一般に都市生活者が地方へ出掛ける際に、それとなく気になっているのがトイレだとう。「水洗トイレがあったからほっとした」という言葉をよく耳にする。

トイレといえば、最近の受験生は複数の大学に合格した場合、トイレの綺麗な大学を選ぶという話を聞いたことがある。信じられないような話であるが、それほど若い世代のトイレへのこだわりは大きいといえよう。観光地の公衆トイレについては全国的に行政がかなり力を入れており、「汚い、臭い、暗い、怖い」から「清潔、安

全、快適」へのイメージチェンジが進んでいる。北海道も例外ではないが、すべて水洗化されているわけではない。

水洗化の 前提条件

トイレを水洗化するには、まずトイレの排水の始末を考えなくてはならない。農業地域では、農用水とのかかわりで、浄化槽の設置には難しい問題を抱えている。浄化槽を設置しようとする場合、下流五〇〇メートル以上の民家からの同意を得るように行政が指導している市町村が多いと聞く。土地改良区によっては浄化槽の設置を認めていないところもあるらしい。

農業用水の全窒素の基準値は1ppm以下である。ちよび雨の平均的な窒素濃度と同じになっているところが多い。農業用水の窒素分が多すぎると、稲が青立してしまつていつ被害がでるかからこの基準が決められているところであるが、実際にはもつ少し多々

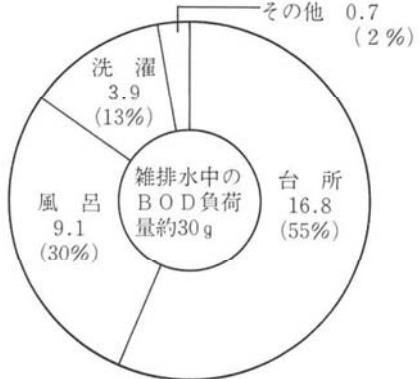
なつても被害は出ないよつである。長野県の諏訪地方のように二・五ppmを事実上の基準にしていくところもあり、東京大学の中西準子先生は「下水道 水再生の哲学」(朝日新聞社)の中で「農業用水中の窒素の基準値を三ppmくらいに緩和すべきである」と提案されている。

し尿処理だけの「単独処理浄化槽」による水洗化がかなり普及しているが、放流水はBOD九〇ppm、窒素・リン除去率〇%であるから、たとえ基準値が三ppmに改正されたとしても農用水に放流することは無理である。都市生活との格差を解消するために、トイレの水洗化が望まれているのに、やはり下水道が普及するまで待たねばならないのだろうか。「単独処理浄化槽」より水をきれいに浄化できる装置があれば、解決できにちがいない。

一人当たり の汚れの量

水洗化されていない場合や簡易水洗の場合は、汲み取り式になつていて、トイレからの水は放流されないから、農業地域には水汚染問題はなないように思えるかもしれない。しかし実際にはトイレ以外の生活雑排水のたれ流しによる汚れがかなりあって、河川、湖、海域を汚している。生命の源である水の汚れがますますひどくなりつつあり、都市部の問題としてだけではなく、農業地域でも生活雑排水対策を急がねばならなくなつてきている。

図-1 生活雑排水中のBOD負荷量の構成



(単位: g/人・日)

環境庁 水質保全局
「生活雑排水対策推進指導指針」より

環境庁の水質保全局監修の「生活雑排水対策推進指導指針」によつて、し尿と生活雑排水を合わせた排水の汚れをBOD負荷発生量で示すと、一人一日平均四十三gである。その内訳は、し尿が三〇%で十三g、生活雑排水が七〇%で三十gとなつている。生活雑排水の内訳をみると台所から五五%、風呂から三〇%、洗濯一三%であり、これだけで九八%を占めている(図-1参照)。

近年、この生活雑排水と水洗トイレの水を一緒に処理する「小型合併処理浄化槽」が開発されて、水をきれいに自然界にもどすことができるようになった。国や都道府県からの補助制度もあり、水洗化の可能性は大きくなつたといえるのではないだろうか。

小型合併 処理浄化槽

「小型合併処理浄化槽」のことを中西準子先生は「個人下水道」とよばれている。浄化槽という言葉が、従来の「し尿処理浄化槽単独処理浄化槽」を連想させてイメージが悪いからとのことである。し尿と生活雑排水とを合わせて処理するこの装置は、いくつかの市町村の排水を一緒に集めて処理する「流域下水道」、市町村単独の「公共下水道」や農業地域に限って農水省の補助金の対象となっている「集落下水道」と同様またはそれ以上に水をきれいにして自然界に返すことができるので、各戸に設置されている下水道と考えられる。「個人下水道」とはなかなか良い名称であると思う。

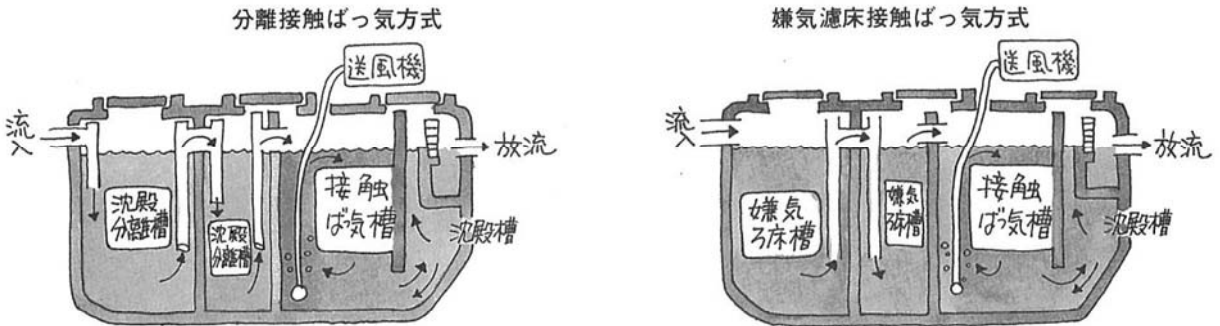
浄化槽法によって、建設大臣の認可を受ける正式名称は「小規模合併処理浄化槽」であるが、全国浄化槽団体連合会では「小型合併処理浄化槽」とよんでいるので、



筆者が、実際に高性能合併処理浄化槽の処理水（写真右側）と終末下水処理場の処理水（写真左側）からサンプルを採取し、アンモニア態窒素の検定試薬で発色させたもの。高性能合併処理浄化槽の処理水からは、アンモニア態窒素はほとんど検出されなかった。

「槽」はBOD除去率が六五％であるのに対して「小型合併処理浄化槽」は九〇％以上である。認定の際の放流水の基準はBOD二〇ppm以下で、終末下水処理場からの放流水と同じに定められているが、実際には一〇ppm程度で、四〜五ppm程度の装置もある。実験施設ではあるが、「大型合併処理浄化槽」もあわせて、全国十数箇所に設置されている石井式水循環システム（高性能合併処理浄化槽）ではBOD一ppmでアンモニア窒素もほとんど検出されず（写真参照）、透視度一級以上という水道一級の基準を満たした、飲み水に近い水にまで浄化する。さらに処理水を再び水洗トイレの水として

図-2 小規模合併処理浄化槽のしくみ



物型式浄化槽協会パンフレットより。
小規模合併処理浄化槽の処理方式は上記の2方式があるが、いずれも微生物の働きを利用して浄化を行う。

図-3 浄化槽内のおもな微生物

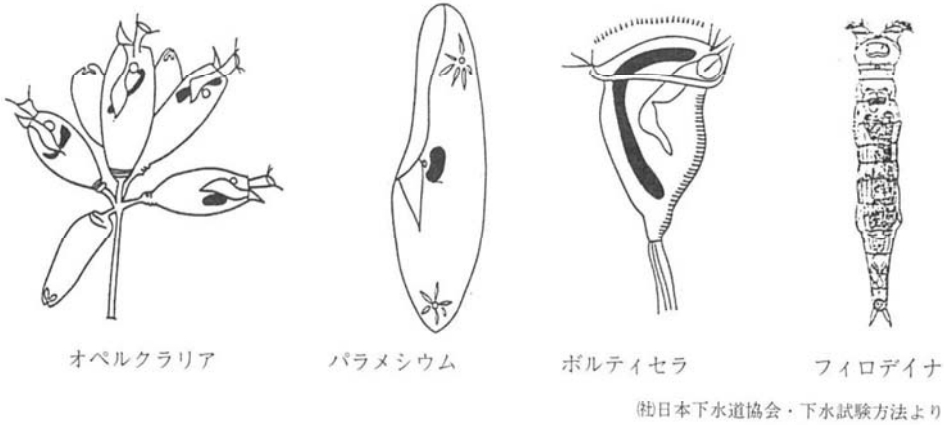
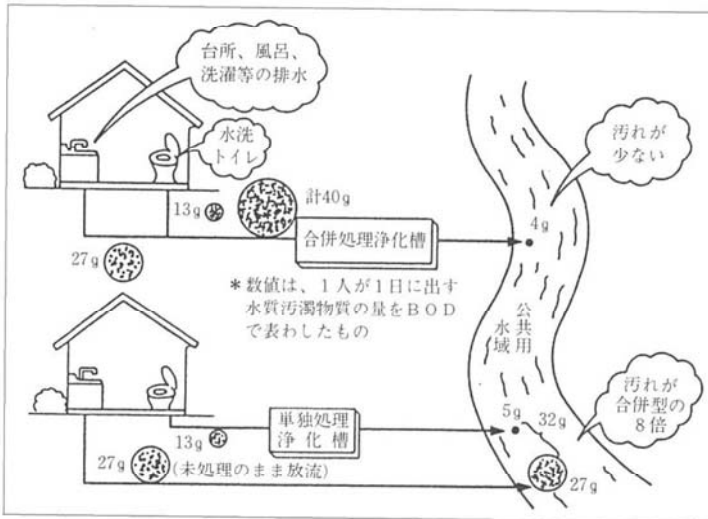


図-4 合併処理浄化槽と単独処理浄化槽の比較



厚生白書・1991より

再利用したり、洗車に使ったり、庭に散水したりしている。この装置も他の「小型合併浄化槽」と同様にリンの除去率はあまりよくないが植物への灌漑用には、かえって適しているとも言われている。ともするとトイレの水を生活雑排水で薄めて捨てるから「小型合併処理浄化槽」の処理水はきれいなのだと勘違いされることがあるようだ。しかし、「小型合併処理浄化槽」は自然界の仕組みを十分に生かして、嫌気性微生物と好気性微生物の両方に有機物をゆっくりと順序よく消化分解してもらうことによって、汚水を浄化するようになっている装置であるから、水がきれいになって出てくるのである。また、微生物が休息しながらそれぞれのペースで有機物を消化分解できるように、ろ床の中にある。流量調整装置がついていれば浄化の効率はさらに高くなる。

「小型合併処理浄化槽」といわれている浄化槽には、「嫌気ろ床接触ばっ気方式(図-2)」と「分離接触ばっ気方式」の二つのタイプ

プがある。社団法人全国浄化槽団体連合会によれば両タイプの性能は同等であるとされている。浄化槽内で有機物を食べてくれる主な微生物には図-3のようなものがみられる。

一般に「小型合併処理浄化槽」で処理された水の汚れの量（BOD負荷量）は「単独処理浄化槽」のみを設置した場合の八分の一に減る（図-4）。高性能合併処理浄化槽（実験用）では、さらにBODの値は小さくなる。

実験用に設置されているのは第一工業大学の石井勲先生の開発された装置で、その仕組みについては石井先生と大阪大学工学部（循環科学研究室）の山田国広先生との共著、「下水道革命—河川荒廃からの脱出」（藤原書店）にくわしく書かれているので一読されたい。

一昨年の秋、久留米大学でエントロピー学会の第七回シンポジウムが開催され、佐賀県鳥栖市と福岡県柳川市に設置されている実験施設を見学する機会を得た。大型（四百人槽）と小型（六人槽）の

両方を見せていただいて、この装置を普及させれば、莫大な費用と時間のかかる「広域下水道」や、「公共下水道」をこれ以上増やさないほうが、河川も湖も海もきれいになるのではないかとさえ思ったほどである。特に農漁業地域には是非導入してほしい装置であると思った。

残念ながら、現在までのところこの装置は建設大臣の認可をとっていないので、補助金の対象にならない。認可をとった市販品の中にも、石井式の原理にならった比較的浄化性能の高い装置もあるのを、慎重に選択すべきである。

補助金制度

「小型合併処理浄化槽」を設置するに当たっては、市町村が設置を決めて申請すると、厚生省と地方自治体の「合併処理浄化槽設置整備事業」に従って、市町村に対して国費と地方自治体費による補助金が交付される。厚生省は昭

和六十二（一九八七）年度から、北海道では平成二（一九九〇）年度からこの事業を開始している。

「月刊浄化槽」一九九一年八月号によれば、平成三（一九九一）年度までに厚生省の「合併処理浄化槽設置整備事業」による補助金を受けて設置整備をした市町村の数は、一、一〇一となっている。

このデータから都道府県別・年度別の事業実施状況を表-1にまとめてみた。

北海道でこの設置整備事業を開始している市町村は、昨年度（一九九〇年）に「えりも町」、「厚真町」、「鶴居村」の三町村があり、本年度はさらに「鷹栖町」、「東神楽町」、「羅臼町」、「常呂町」の四町が加わり、合計七町村になっている。来年度は更に増えることだろう。

合併処理浄化槽に対する助成制度として、補助金制度のほかに融資制度もある。公害防止事業団の融資制度と住宅金融公庫の融資制度がこれにあたる。

自然界の仕組みを生かして使う

「小型合併処理浄化槽」を使う際の注意事項として厚生省浄化槽対策室監修のパンフレットの中に七項目があげられている。その中に「便器の掃除に塩酸などの劇薬を使わないでください」、「台所からの野菜くずや天ぷら油などを、できるだけ流さないようにしましょう」という項目がある。これは「合併処理浄化槽」が自然界の浄化作用と同じように、生態学でいう分解者にあたる微生物の働きによって浄化しているからである。

生物を殺してしまうような劇薬をつかってはならないし、台所から流す水についても、微生物が働きすぎにならないような思いやりが必要なのである。とくに油は小さじ一杯でも風呂桶一杯半以上の水で薄めて、やっとコイやフナのような汚れた水にも棲める魚が生きられるというほど水を汚すので絶対にそのまま流してはならない。

このパンフレットには書かれていないが、洗剤にも注意すべきである。石井式の合併浄化槽の利用者たちは、合成洗剤ではなく石けんを使っておられた。ウニの受精卵に悪い影響のある合成洗剤は当然、有機物を分解する微生物にも影響があると考えられるからである。微生物が死ねば浄化作用が低下するばかりでなく、死んだ微生物が汚泥となって溜まるので、それを抜き取るために費用もかさむことになる。下水処理場でも二次処理は微生物によって処理しているのだから、これらの注意は都市生活でも守らねばならないことである。

「小型合併処理浄化槽」を使って、処理水も再利用し、廃食用油は台所から流さないで、「腐食用油リサイクルせつけん（エコマーケ商品）」の原料にして、そのリサイクルせつけんを日常生活で使えば、地球にやさしい生活の第一歩をふみだしたことになる。

汚れた水を見えない地下の太い管で運んで処理するようになってから、水も使い捨て商品の中に組

表-1 合併処理浄化槽設置整備事業実施市町村(厚生省補助分のみ)

都道府県	'87年度より	'88年度より	'89年度より	'90年度より	'91年度より	合計
北海道	—	—	—	えりも町ほか2	鷹栖町ほか3	7
青森県	—	—	—	八戸市ほか1	青森市ほか2	5
岩手県	—	水沢市	大船渡市ほか5	花巻市ほか6	一関市ほか9	24
宮城県	—	—	川崎町ほか1	仙台市ほか4	気仙沼市ほか6	14
秋田県	—	—	秋田市	—	横手市ほか5	7
山形県	山形市	米沢市	小国町ほか2	酒田市ほか3	上山市ほか8	18
福島県	—	—	—	原町市ほか2	本宮町ほか6	10
茨城県	水海道市ほか3	水戸市ほか9	八郷町ほか2	つくば市ほか10	結城市ほか12	41
栃木県	足利市	栃木市ほか9	佐野市ほか11	河内町ほか8	壬生町ほか5	38
群馬県	館林市ほか1	高崎市ほか5	伊勢崎市ほか8	桐生市ほか5	松井田町ほか3	27
埼玉県	館能市ほか3	越谷市ほか6	大宮市ほか12	深谷市ほか9	春日部市ほか12	47
千葉県	千葉市ほか5	船橋市ほか8	勝浦市ほか18	我孫子市ほか20	木更津市ほか9	65
東京都	八王子市ほか5	町田市	—	—	—	7
神奈川県	—	伊勢原市ほか1	大和市ほか6	愛川町ほか2	小田原市ほか2	16
新潟県	—	京ヶ瀬村	三条市ほか2	新潟市ほか5	長岡市ほか9	20
富山県	—	富山市ほか5	新湊市ほか2	入善市ほか1	上平村	12
石川県	—	金沢市	加賀市ほか1	—	柳田村	4
福井県	—	勝山市	武生市ほか3	福井市ほか3	敦賀市	10
山梨県	—	須玉町ほか1	鳴沢村	都留市	上野原町	5
長野県	川上村	長野市ほか6	松本市ほか9	伊那市ほか15	諏訪市ほか21	56
岐阜県	岐阜市ほか1	高山市ほか3	中津川市ほか3	恵那市ほか7	大垣市ほか6	25
静岡県	富士川町	下田市ほか3	静岡市ほか14	天竜市ほか10	島田市ほか6	38
愛知県	—	豊橋市ほか28	一宮市ほか31	大府市ほか7	祖父江町ほか2	72
三重県	—	上野市ほか2	嬉野町ほか2	鈴鹿市ほか1	津市ほか8	17
滋賀県	彦根市ほか1	大津市ほか5	近江八幡市ほか3	高月町ほか2	日野町ほか8	24
京都府	—	—	京都市ほか6	三和町ほか1	亀岡市ほか3	13
兵庫県	安富町	千種町ほか7	姫路市ほか5	神戸市ほか4	三田市ほか1	22
奈良県	—	—	下北山村	平群町ほか3	生駒市ほか3	9
和歌山県	—	—	田辺市ほか5	南部町ほか4	新宮市ほか7	19
鳥取県	—	—	—	米子市、	日南町	2
島根県	—	—	—	木次町ほか2	出雲市ほか9	23
広島県	早島町	広島町ほか2	安来市ほか6	玉野市ほか12	井原市ほか14	44
山口県	—	岡山市ほか3	津山市ほか10	広島市ほか11	尾道市ほか7	32
徳島県	—	—	—	宇部市ほか5	萩市ほか15	31
香川県	—	—	—	松茂町	上勝町ほか4	13
愛媛県	寒川町	三木町	高松市ほか2	阿南市ほか4	丸亀市ほか8	16
高知県	—	新居浜市	野村町ほか1	塩江町ほか1	西条市ほか6	16
福岡県	—	佐川町ほか5	中村市ほか7	川之江市ほか5	土佐清水市ほか18	39
佐賀県	—	大牟田市ほか1	中間市ほか8	安田町ほか5	久留米市ほか20	47
長崎県	—	基山町	鳥栖市	久留米市ほか20	大宰府市ほか13	42
熊本県	大村市ほか5	熊本市ほか3	—	鹿島市ほか1	伊万里市ほか7	17
大分県	—	佐世保市ほか7	八代市ほか15	—	松浦市ほか5	16
宮崎県	—	大分市ほか1	別府市ほか2	—	鹿央町ほか11	53
鹿児島県	—	—	宮崎市ほか1	—	豊後高田市ほか11	34
沖縄県	—	—	出水市ほか3	—	延岡市ほか7	18
全国計	—	—	—	—	—	330
						0
						1101

月刊浄化槽 1991年8月号のデータから作成

み込まれてしまっているのが都市生活である。ようやく少しずつ使い捨ての生活を見なおそうという運動が進められるようになってきた。廃棄物問題とのからみでリサ

イクルはトレンディとまでいわれるようになった。自分の汚したものを自分できちんと始末して自然に返すことのできる「小型合併処理浄化槽」を導入したトイレの水

洗化は、まさにトレンディな事業といえるのではないだろうか。これこそ自然との共存をめざした新しい価値観に基づいて、快適さを追求する試みの一つである。

防風林により、耕地は整然してたらずみ
寒冷地酪農をささえている。



自然環境との調和をめざした 農村計画の試み—中標津町の事例—

中標津町農林課農業開発係長 木内 節 雄

たどりついた 寒冷地農業「酪農」

当町に農業者が入植したのは、明治末期のことであった。その後、昭和三年頃から本格的に、根室原野に開拓のクワが入り、当時の作目は本州に準じたため、冷害による不作が相ついで離農された人々が多かった。その後、乳牛の導入で、寒冷地農業「酪農」の基礎が始まった。当時は飼育の未熟性から高い牛を失った人もいたよう

だ。
幾多の困難をのり越えて、昭和三十年代に補助事業による農地造成は経営規模の拡大、又機械による農作業は良質な粗飼料の確保に重要なことであった。多頭飼育と共に、食生活の欧米化に伴って乳製品の普及は国民への食糧供給基地として位置づけられた。寒冷地での農業、冷害を幾度も経験した祖父母は早くから畑の脇に植樹を続けたことで低温から、風害から農作物を守ることができた。

中標津市街は近年急速に拡大し、都市計画に基づく市街化形成をたもっている。



防風林、家敷林は現在もその役割を果し続けている。一方、国の森林計画で約五〇〇ヘクタールに縦横に走る国有保安林は、地域農業を守り続けている。空から見る酪農地帯は、国有林、民有林、整備さ

れた牧草地、地域経済の大動脈、舗装された幹線農道、大型サイロ、農機具庫、新築された住宅を見る限りでは、酪農王国及び経済大国を思わせる景観である。国の農業政策で乳価は下がる、ある時は牛乳の生産調整、酪農家の副収入である肉牛となる雄仔牛及び廃用牛の価格の暴落、輸入自由化で外国からの安価な乳製品と国産品との競合でますます乳価が下がると

思われる。国際化の時代に入って酪農家は早くから配合飼料の外国依存での酪農経営を余儀無くされた。高品質の飼料は輸入に依存し、経費の中で相当の高い率であるが

農村景観が観光資源

直線の道路を車で走ると、牧草畑がやたらと広い。収穫時期には青草の香りが酪農地帯の特徴ともいえる。又、大きな牛舎、スチールサイロは高さ二十五メートルを越え、林の中からサイロだけが見え、車が近づくと農家が見えてくる。根室管内の酪農は気候的条件に決して恵まれてはいない、牧草の収穫量も多くはない、そのために広い

高品質の牛乳生産には、必要不可欠でもある。自給飼料での酪農経営をめざすことが地域の大きな課題である。

草地を持たなければならぬ。おそらく一農家が所有する面積は全国的にもトップクラスと思われる。大都会から訪れる観光客は、一

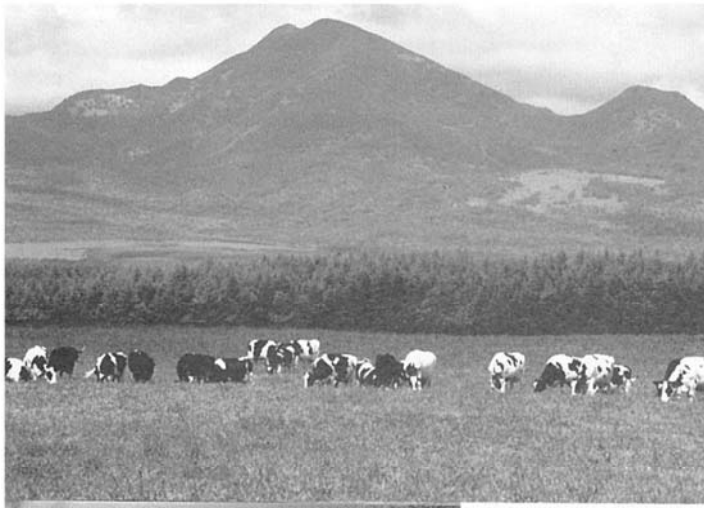
様に「スケールが大きい」と言う。緑のジュータンを一面に敷きつめた牧柵の中で牛の群がのんびりと草を食む風景は、まさに牧歌的な景観で、人々に感動を与える。又昭和六十年から三年間、ファームステイ「酪農民宿」、大学生を対象に観光会社が募集し町が地元宿泊先の準備をした。参加者は「空の青さがちがう」「牧歌的な風景が好き」「樹木の緑が濃い」と大都会では味わえないことが、感想文に残されている。中には、酪農は「臭い」「汚い」という不評もあったが、二回も参加した女性がいたことは、全体評価で「良い」

と自己満足をしている。

平成元年度に国土庁が主催した「農村アメニティコンクール」に応募し優秀賞をいただき、特に農林景観を重点に「整備された草地と耕地防風林の調和のとれた景観」又、北欧風の農家住宅と手入れの行きとどいた芝生、バランスのとれた牛舎、赤いサイロは遠くからでも周囲の緑と調和のとれた色彩が農林景観を強調しているようである。

又、町営牧場では約一、一〇〇ヘクタールの大草原に、一、三〇〇頭の乳牛の放牧風景は、北海道酪農を代表する景観と自負している。この牧場に隣接している「開陽台」、小高い丘が近年観光客に人気がある。この丘からは東には、北方領土「国後島」がオホーツク海に浮いて見える。又、この丘からは日本で一番早い日の出を見ることが出来る。冬の一月頃、気温がマイナス二十度を超えた朝、四角い太陽が昇る。写真マニアにとって、貴重な丘でもある。

夏の観光シーズンではオホーツク海、太平洋の水平線が望め、根白い牧柵や清潔な牛舎周りは、来訪者にも快さを与える環境づくりを行っている。



写真(上)

武佐岳を背にした一、一〇〇haの広大な草地に、三〇〇頭の牛が放牧されている町営牧場。

写真(下)



視界330°を誇る開陽台は、地球の丸さを実感できる場所として、観光客の憧れの場所



牧場周りは開放され、ポニーなどとふれあえる農場づくりに努めている。

者は不満をいだし、酪農家が困惑したことがあった。その時期に酪農青年達は、自分達が生産した牛乳を利用して、乳製品を製造し直接販売すべく、会

があり、観光客用に空港で販売されている。計根別農協では、羊「サホーク種」の飼育で成功している。酪農家の副業として始まったが、人気が高く品切れがある程である。又副産物の毛糸の利用では、天然染料で染め、毛織のセーター、帽子等の販売に力を入れている。天然素材が見直された今日、北国の生活文化が変わりつつあるように見える。

釧原野が三三〇度の視界で目に入る。又、夜空の美しい丘でも有名(??)である。環境庁から「星空の街」に指定を受けたのは四年前のことである。

一方、この丘「開陽台」を全国に紹介してくれたライダー(オートバイで全国を旅行する若者)で

ある。彼らはこの地でテントに宿泊、根室ノサップ岬、野付半島、知床羅臼、阿寒湖、摩周湖へと道東の観光地を回り、道北へ道南へと再び旅に出るのである。この地の良さ、この丘の価値をより知っているのは彼らかも知れない。

自立、行動する酪農家

農業政策は、時として農業者を犠牲にすることがある。それは、牛乳生産調整であった。生産物が

売れない時には自家消費、又は捨てなければならぬ。大型酪農の経営が軌道に乗った時期で、経営

社を協同出資で設立した「ミルクレストラン牧舎」では、乳製品をたっぷりつけたメニュー、アイスクリーム、飲用牛乳の製造販売である。近年は観光客が増え、なかなか好評である。又「フィック北進台」では、アイスクリームの製造販売は空輸され都会で人気が高い。クリスマスケーキもアイスクリームで作り上げた酪農青年のアイディアでもある。一方、酪農家が飲用牛乳を製造し、各家庭に宅配をしている「いぬい牛乳」の低温殺菌の牛乳には一味違うもの



ヨーロッパ風の住宅、広い芝生、花壇で美しい農村景観創りを行っている。

酪農地帯で、新しい食文化の開発を試みている施設「畜産食品加工センター」がある。ここでは、乳肉の製造、販売はもちろん、酪農家の主婦、一般市民をも対象にしたソーセージの製造講習会も盛んである。午前からは始まった講習会、おかあさんの手造りソーセージは、夕方までかかる。持ち帰った製品は、酪農家の夕食に並んでいることと思う。最近、肉製品の製造器具が販売されていることを知った。決して困難ではない知識と技術が伴えば、家庭で造ること

も夢ではないように思う。

一方、同じ農産物の出荷でも、付加価値の高い品は価格も高い、と気づいた農家の青年集団がいる。「マリンスクラブ」では澱粉用から食用馬鈴薯の生産、販売をしている。彼らは消費者と生産者が見える農産物の販売に力を入れている。

輸送用ダンボールの中のパンフレットには、彼らのメッセージ、全員の顔写真が入っている。大消費地での販売ルートの確保に懸命である。

近年、消費者の志向も無添加食品、低農薬野菜、天然素材の衣類等と、健康面、安全面で本物を求めるようになった。

又、生産者も消費者の要望を満たすべく努力をして、消費者と生産者の距離が短くなることと思う。

経済大国日本でも、外国からの輸入農畜産物に人間も家畜も依存度は相当高いように思う。せめて酪農王国北海道に住む私達は、地元農畜産物を食卓に送りたいものである。



酪農家が経営するレストランでは、都市住民（観光客）との交流が益々盛んになっている。

快適な農村環境をめざして

人間の生活には必要条件として衣食住があると思うが、忘れてならないのは、その人間が生活して

いる「環境」と思われる。農業という職業ほど、自然環境に左右されやすいものはないように思う。

酪農家の高齢者たちは、新鮮な野菜を「朝市」で住民に提供され食卓をうるおしている。



根室農業が「草地型酪農」に至るまでには、歴史的に浅く、短時間に近代化大型酪農地帯に完成したために、環境整備が遅れをとったことを農業者自身が感じている。と同時に地域の課題として、動きだしたように見える。

都会にいたる兄弟が実家に帰ると一番先に困難な問題が発生する。それはトイレである。散在型の農村集落に国の補助事業の導入があてはまらないために、個別に処理施設が必要となる。今後地域の大きな課題でもある。

一方、農業生産を重視した農業開発後の問題としての「景観整備」は、相当の年月が必要であるが、今から着手しなければならぬ。自分達の子供達のために、快適な居住空間をつくるために、地域総ぐるみの発想を求めたい。



温泉郷、養老牛は町民はもとより観光客の憩いの場所となり7～9月にはヤマベ釣が最適。

農家らしい農家をめざして

自然と循環し持続する農業を

私が農業を営むこの地方は、勇弘原野の東端に位置していて、家のすぐ裏から続く山は遠く夕張山地にも日高山脈にも連なっている。町の主な産業は稲作で、私も多くの農家と同じ水田専門の農家である。

二十年前、私の家の耕作地は水田が六ヘクタール、畑が七ヘクタールで、山に続くゆるやかな傾斜地には採草地があり、沼の周辺の湿地は広々とした放牧地であった。馬が耕作の中心で、乳牛も鶏もいた。多忙ではあったが、全体にまとまりのある農家らしいたたずまいであった。

ところが間もなく農基法農政の選択的拡大や、農村生活の合理化が声高に叫ばれはじめ、父は経営



我家の前は水田が広がり、すぐ裏は山となっている。

農業
勇弘郡厚真町

本 田 弘

を所得の多い大規模稲作機械化一貫体系に切り替えることにした。毎年のようにブルドーザーによる基盤整備とダンプによる客土事業が続いた。

畑も丘陵地も湿地も、みるみるうちに押しならされて水田になり、あたりの風景は一変した。私の家からだけでなく、周囲の農家からも家畜類が姿を消した。指導機関は自家用野菜を多種類作ることさえ生産性に合わないから買って食べたほうが得だと話す状態になった。出来上がった水田を全面積作付できたのは二年だけで、減反が始まり、拡大され続けてきた。他用途米の導入から米価や転作奨励金の大幅減額と、水田専門農家には厳しい経済状況となり、農業をとりまく環境も坂をころがり落ちるように悪化してしまった。

私は流されまいと努力したつもりではいたが、やはり足もとをすくわれてしまい大きな経済的負担に苦しむことになってしまった。「生産性の高い中核的農業経営の育成」などということはをはるか遠いところのこととして聞くよう

になり、いまはただ自分が農業を営む機会を与えられたこの土地で、この地方の気候と自然にかなった自分なりの農業をするという、しごく当然のことを見直してそれを進むべき方向と確信するようになった。

いまでも試行の過程ではあるけれど、私の農業のなかに、いつの間にか羊や山羊や鶏が飼われるようになってきた。これらの小家畜は、その堆肥で畑の土を肥沃で健康なものにしてくれ、農薬を使わないで収穫できる畑作物は、卵や肉とともに家族の食生活を豊かなものにしてきている。生まれた子羊や庭で遊ぶ鶏と子どもたちとの心暖まるエピソードにも枚挙のいとまがない。

あまりに身近すぎて、ついついその素晴らしさを見失いかけていた裏山も、冬の暖房を全面的に薪に切り替えた頃から、ほど良く手入れがされるようになり、林の中の道も歩き易くなった。

最近では、野菜や卵を食べてくれる人達や山歩きが好きな人達が尋ねてくれることが多く、都会で

生活する人達の話聞くことも多くなって、そのことが農業の足元を見つめ直す良い機会ともなり、教えられることが多い。

地球温暖化、酸性雨等々、最近地球規模での環境の危機が問題とされるようになってきているが、農業も、食糧の安全性や、土、水のかかりで人間の生活や環境に大きな課題を背負っていることも事実である。

農業基本法のもと、経営の近代化、規模拡大、選択的拡大、生産性の向上、他産業並の所得などかけ声がかけてられて久しいが、結局のところ儲からない農業は止めざるを得ず大量の離農者を出した

し、片方で生産性の高い農畜産物は限りなくその中味が生命の糧としての食糧から遠ざかりつつある。

農業基本法には何かが欠けていたし、そのことに気がつかない限り、日本の農業が自然環境を保全することも、農業として持続することもできないように思えてならない。

小家畜を飼う

私は稲作が主だが、減反転作に小麦、大豆、小豆、デントコーン、馬鈴薯、カボチャ等を作付する。当然大量の稲ワラ、麦殻、大豆殻、もみ殻、青米、米ぬか、屑麦、屑大豆、残りイモ、未熟カボチャ等が産出される。

私はこれらを利用して、今のと

ころ綿羊十五頭、鶏を二百五十羽ほど飼っている。チャボもいるし、山羊や七面鳥が仲間入りをしてきたこともあった。

綿羊

羊は裏山の一部や農道を放牧場



羊を放牧する農道

ど手をかけない。林間放牧の利点はいろいろある。山の下草が食べられて林の中がすっきりするし、生命力のある山野草を食べながら山の斜面を上り下りする羊は健康に育つ。羊を多頭飼養する人は寄生虫の駆除に苦労するというのが、私は羊に注射をしたことも、薬を飲ませたこともない。山野草の中に薬効のあるものがあるのかも知れない。羊の食欲は旺盛なもので、これを利用して納屋の周辺や道端の草、稲刈りの終わった田の畦草な

どを草刈りさせる。柵で囲って追い込んでおけば、うっそうとしていた草むらも、刈り込まれた芝生のようになる。柵を破って野菜畑に入ろうものなら一大事件になってしまう。

冬を越す飼料は梱包している大豆殻が主となるが、この中には大豆が残っているので羊は大好物である。肩麦も好むし、しばれたカボチャでもガリガリとがじる。

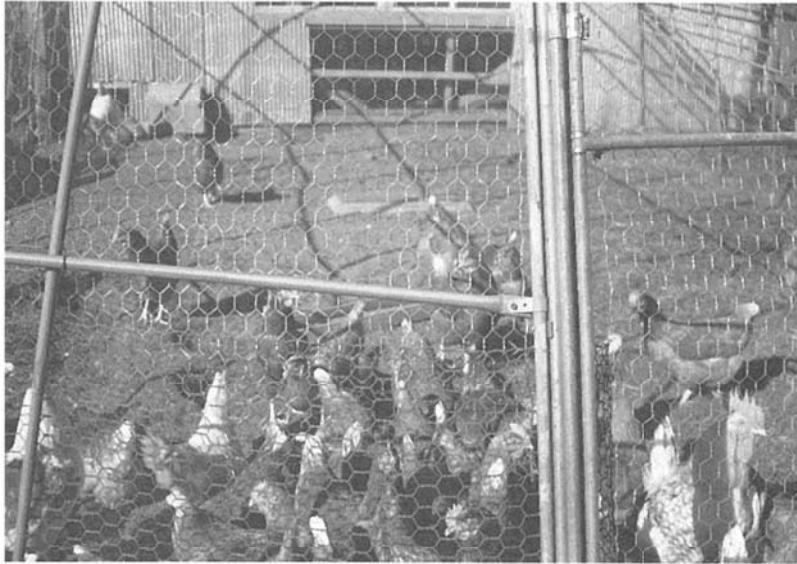
私の羊飼育は肉の自家消費が主目的で、未だ毛や毛皮の利用まで至っていないことが課題になっている。羊は毎年一頭か二頭の子を産んで増える。時折、家畜商が庭先まで買いに来ることがあり、その時は売ることになっている。羊を飼うには工夫した放牧場が必要なので、そのために金網のフェンスは購入しなければならぬ。羊に金網を買ってもらう。

近くに屠場があるので、正月には二〜三頭の羊を連れていき、枝肉にまでしてもらう。毛皮も塩漬けにして、専門家に送ってなめしてもらったこともある。私は羊を飼う仲間と羊肉の加工を試みたこ

とがあるが、結局羊肉は加工したり冷凍したりして食べるよりも、食べる二〜三日前に殺してムロなどで熟成して食べるのが一番おいしいと思う。

肉は部位によって仕分け、生ハム、タタキ、ステーキ、焼肉、シチュー等に利用する。アバラ骨や首の骨に残っている肉も炭火で焼いて塩・コシヨウで食べると無駄なく食べられる。正月のうちに家族と来客で二頭の羊はきれいに食べられてしまふ。遠来の客が来たり、他の行事の時にも羊を利用する。

私が生き



人が行くと寄ってくる鶏

ている羊の前で羊を食べる話をすると、かわいそうではないかと言われるが、私は羊を食べるようになってから、本当の羊のかわいさがわかったと思っている。食べる羊は生きているうちにかわいがってやる。

鶏

家族の食べる卵を自給するため十数羽の鶏を飼っていたが、広々とした場所で健康そうに飼われている鶏を見て、都会から尋ねて来る人が卵が欲しいというので与えると大変おいしいという。市販されている卵と比べるとずいぶん違うようで、需要に応えているうちに鶏飼いになってきた。ヒナから成鶏にする時、身体を大きくするため、春や秋は放し飼いにする。そのためキツネ、トンビ、タカなどに襲われたり、交通事故等で減るものも多い。庭での放し飼いの一番の利点は、鶏が人なつくようになることである。卵を生み出せば鶏舎で飼うが、遊び場は温床の古パイプで広いものを作っている。古ビニールをかけて、冬期間でも土遊びができるようにしている。都会の人達が卵を喜んでくれる理由に、飼料を自給していることもある。購入するのは魚粕と力キガラで、トウモロコシ、麦、米糠、緑餌などは全部自まかないしたものである。夏は毎日草を刈って与え、秋から来春までは屑イモとカボチャを毎日煮て与える。古い

鉄の大鍋、ウスとキネが現役で働いている。大根菜は冬の卵の味を大変良くするので、貴重なものとして保存する。一本残らずヒモであんで乾燥しておく。他にも台所から出る残り食べものも鶏や羊に回されるものも多い。

もちろん、オンドリも二十羽に

山林を手入れする

裏山は雑木林で、木々の種類は多様である。植林地のように齊一な木材を求めることにはならず、一度に切って売っても大した価値にはならないことだろう。しかしそれはお金に換えた場合の話で、日々の生活に裏山の恵みを生かすことを考えれば、むしろ樹種が多いことが生活との多様なかわりを可能にし、それだけ生活を豊かに支えてくれる。

山仕事を始めた頃は、単に薪を切り出し、きのこのホダ木を切る目的で山に入ったが、今は裏山の全体が豊かになり、美しくなり、人が歩いて楽しいものになるかに心をくつき、そのために自分が少

一羽入れられているので、二方所にある鶏小屋から、朝早くから鳴き交わす。生んだ卵は、三日とおかずに配達して回る。少し市価より高価でも皆が喜んでくれる、と妻の楽しい仕事になっている。廃鶏の加工利用を考えねばならない。

しても役立てばと思つて山で働く。山の木は切りすぎではならないが、やはり切らなければならぬものである。数多くの木の中から、どの木を切つてどの木を残すかを決めるには、いろいろな要因を考慮することが大切で、難しくもあり、妙味のある仕事となる。

切られた木は薪、建築材、ハサ木、牧柵、杭などに利用される。自家用きのこもホダ木の種類によつツイタケ、ナメコ、ヒラタケ、クリタケ、エノキタケ、タモギタケなどを植菌する。

何年も山で働いているうちに道が歩き易くなって、最近では都会の人達が裏山の散策を楽しんでく



子供達が江戸時代の家だという我が家

れることも多い。芽吹き頃の山菜とり、夏の緑陰、紅葉の下でのきのことり、冬枯れの林の中を予ども達と動物の足跡を追うことも楽しい。雪の比較的少ないこの地

方は冬の山仕事に好都合である木が休眠している冬に木を切るこゝとが材の質にも良いので、農家の冬の仕事として好ましいことである。

都会の人達との交流

いつの頃からか、田舎の私家を訪れてくれる都会の人達が多くなってきた。

ある知人は親子で四季折々に尋ねてくるが、今では裏山の沼べりに専用のキャンプ場を作ってしまった。

った。彼は、子どもが小さい時に農村の人の働く姿や田舎の自然に親しむことは、人間の豊かな情操を培ううえで大切なことだという強い信念を持っている。

卵を食へてくれているあるグループの母親と子ども達が、卵のルーツを尋ねようと多勢でやって来た。庭で放し飼いにされていた鶏と喜んで遊んでいると、

尋ねて来た多勢の子ども達と母親が裏山で食事を楽しんでゆく



オンドリがメンドリに乗るので、子ども達はケンカが始まったと母親に告げる。母親は上手には説明をしかねていた。羊に草をやったり裏山を歩いたりして、楽しかったと帰って行った。

札幌のある年配の人達は、都会の住宅の庭でのきのこ作りを楽しんでいる。皆は冬に私の裏山に来て自分達でホタテを切り、春に再び来て植菌する。ナメコ、ヒラタケなどを収穫しているし、マイタケに挑戦をはじめた人もいる。

四季折々、草花や鳥を楽しむに
来る苫小牧のあるグループの人達
は、今年は春のイモ植えや秋の収穫を手伝ってくれた。

私は尋ねてきてくれる都会の人達と、いろいろな話をするのを楽しみにしている。私は農業の話、食へもの話、家畜の話や山林の話などをする。都会の人達にとつて、林の中や沼べりでたき火をしたり、炭火を利用しての昼食をすることも楽しいことのようにある。

自然と手を携える 農業を目指して

私は二十年前、農業基本法を
本として経営の近代化、規模拡大、
生産性の向上等について真剣に考
え、とり組んできたが、この二十
年間で学んできたことは、結局、
農業は自然に溶けこみ、自然と手
を携えて行くことが、最も理に叶
ったものであると理解するようにな
った。

私達は、環境破壊を防ぎ、都会の
人達に安全で安心して食へてもら
える食糧を供給できるものである
と確信している。

そのことが、今、世界的に叫ば